創作

淨行

伊丹優曇華

朝方は天氣もよくて二六時間中青天井の見へない此の土地も、工場の煙塔より吐き出される煙も、まばらなのか一入晴れてゐたが午後からは、ばい煙も大分と殖へ、かてて加へて天候が急變して來た。時々思ひ出した樣に安治川あたりから吹きまくる風がそこらあたりの土塵を卷きかへして過ぎて行く、右往左往に行交ふ人は袖を顏にあてゝ此の時ならぬ襲擊を防ぐのであつた。町端の商家の硝子戸はチギッテ投げ付けた樣な時たま小石をも交へた黃い風が吹き付けて、ペチン〳〵と音させるのがなんとなく通行人の心を痛ましめた。

墨を流したような空は夜の幕を降してをるのか、森より家へ家より人へと覆ふのに忙しく見へた。其の上雷鳴は暮れ行く空の靜寂を破つて、かすかに聞へて居たが秒又秒分又分、を加ふに從つて其の島動は激しくなつたと思ふと、粟粒のような雪交りの雨を振り種いて來て通行人の下駄の音も彌々姦しましく、けたてゝ家路をさして急ぐのであつた。

人の足音も大分靜けくなつて戸毎の点燈を吹きすさぶ風のセイか消へては付き消へては付きして寂しそうな淡い光を道端に投げて居た。

大亮は終日の淨行を終へて今し方誓文拂で人を以つて埋めて居る賑榮な大阪の地を離れて住吉の大鳥井の前に來かかつた。白の天笠木綿の合衣のに麻の如法衣を着ながし、木蘭色の七條をかけて、白脚半に草鞋と云ふ出で立ち。つかれ切つた重そうな足を引きずり乍ら、正心庵を目がけて歸るのであつた。

やせぎすな、せのスラリとした三十路を越して未だ日も淺い壯僧であつた。彼は日に焦けた神經質らしい

顔には更に心の深い苦しみと孤獨の影が、いたましい程に刻み付けられて居た。

大亮は全身風雨の爲めにシットリと濡れたまゝ手を無造作に組んで闇路をトボ〳〵と歩み乍ら、

『先師の言はれた「淨行」！行はれた「淨行」是が自分には分らんのだ。淨行は自分に取つて苦に尊くものだ何んの慰安も未方も是に依つて報ゐられぬのだ。

「淨行」是れが人生の全體なのかて、人生はこんなに單調なものか。否其處には深刻な人間味があらねばならぬ。そんなに薄つぺらな者ではないんだ。嚴師より幾百年も傳へられて來た此の淨行！雨の日も風の日も欠行なく、町に出ての托鉢行……今自分が重苦しい足を喘きながら、踏みにじられたあぜ道をトボと歩むように幾代も〳〵もの先師がホンの型の如く傳へて來た淨行……夫が左程まで永久の生命を保ち、絶對性を宿した淨行なんだろうか。そして是が人間として否僧侶として寧ろ自分一個として最高の淨行だろうて。此れ己上何等の最高の願行がないのか是が人間としての總てで全一の「行」なんだろうか否々そうとは思はれぬ。其處に何等かの塞ざされたるある者がなければならぬ。』と引きも切らず取り止めも無い次から次へと並より狹い頗に皺をよせながら考へつゞけるのであつた。

あたりはもうシッポリと暮れて道さへ分らなくなつた。今までひとしきり吹き降つて居た雨はカラリと止んで眞暗な闇をツンザイテ星の光がチラホラと漏れて來るのが漸くにして道をあやまらぬまでに歩を進め得るに過ぎなかつた。南海電車のキシル不快な音がスベルように闇に消へて行く。界隈は全く初冬の靜寂さを充分に味あはせて居た。

彼はまたも思ひに沈んで居た。水の音も電車のキシル雜音も幾度か空をかすめて流れた星の光も倒底彼の沈思の意識よりひるがへさすに餘り力が弱はすぎた。因襲的な型の如き淨行……氏に對する疑問、……內的煩悶……そして「性の悶え」「孤獨の悲哀」……とヒシヒシ靈臺方寸につめかけるのであつた。

いつしか彼の足は正心庵の門に運ばれて居た。

丈助は時鐘をつく爲めに小走りて鐘樓に昇つて行く。

＊　＊　＊　＊　＊

正心庵の背に當つて。高臺にはモーソだのマ竹だのの混り合つた藪が一面に生ひ繁つて居た。住吉街道に向つて右手の方には栗の木か何んだかの落葉樹がコンモリと生ひ立つて居たが大部分の葉は落されて終つた黄ばんだ葉が、アチラコチラに殘つて居て其の隙間々々から寂しそうに家の軒端がチラホラと見へて誰かの匂だが

冬枯れや木立のぞかん賣屋敷

と云ふ冬枯の風情を充分に味はせて居た。

正心庵の門の前には大きな石の塔に「不許葷酒入門」の六字がいかめしく刻みつけられてあるのが殊更に人目に映じるのであつた。門を這入ると直ぐさま小高い處に鐘樓が風雅に建てられて其の向ふの方には寺の建物としては旦て見た事のない、どちらかと云へば宏莊と言ふよりは寧ろ風尙な若し自分が大膽に批評する勇氣を持つならば極く古風な御茶室を何十倍かに擴大された其れの極に地味な建方であつた。

自分達の常識で云ほうならばどうしても板を用ゐなければならないような所にも竹をさいて其に磨きをかけた竹板が用ゐられてあつた。

此の正心庵は今から凡そ二百五六十年前自家一流の異派を立て近州あたりから此地に移つて此の庵を建立した戒律堅固な玄修上人の開基にかゝる名刹である。此の流れが今に至るまで其の法燈が相續されて先代大勤に至つたが大勤は在職四十餘年の法簡を其の高德と嚴格とによつて世人の專敬を大身に集めて居たが去る七年前正心庵の離座敷に現住大亮に世を讓つて閑居生活に這入つたのであつた。そして此の法流の眞精神は「戒律」を以つて其の第一義とし「淨行」は其の實行方面であり体驗の世界であつた。

現住の大亮は七才の時から大勤の嚴格な手に育てられて成人したのであるから世の中の困苦と恁うした寺には有勝ちな寂しい空氣とには充分な經驗をなめて居た。是れと云ふ學校には通學したと云ふのではないが嚴師の昔風な訓育振りを受けた。生れつき聰明な頭惱の持主である彼は相當の年頃となつた時は大署の宗學

と佛教學とにはあら方の了解も得開基以來の漢詩をも物するやうに成つた。

彼は朝五時に起きて約一時間半ばかり朝勤の讀經を修して早々、毎時ものような身仕度を整へて是れと云ふ目あてなしに淨行の拕鉢に出かけるのが一日の日課でありこれが佛に勤める唯一の奉仕であつたのだ。

* * * * * *

それは或る日の夕方であつた。

裏の竹やぶには雀の一群がチュー〳〵と塒を探して居た。山おろしの風が一層の冷めたさを以つて吹いて來る。人通りは云ひ合したようにピタリ杜絶して犬の遠泣きがかすか彼方より聞へて來る。

大亮は師の大勤と臺所男の丈助の手になつたいつもの精進料理で夕飯を契した後で茶の間の直き次ぎである八疊の爐の前につくねんと坐つたまゝ二人は暮れ行くあたりの靜寂を見まもつて居た。

『丈助！お前誠にすまないが御飯をたべたら例の大和川え行つて餅米を廿八日の餅搗きの間に合ふようにあつらへて來て吳れればいゝがな。そして其の序に吉川え寄つて二疊臺の圓座を賴んであつたからそれも貰つて來て御吳れ。』と。

他人を使ふのには是非斯ふなければならない言葉の優さし味を以つて大勤は彼に事付けるのであつた。丈助はきはめて勤勉で實直な下僕である。

大勤が十二三年前毎時もの淨行をしながら大和川に沿ふて河内と大和の境の土堤を歩いてゐた時に彼は田市の中の野雪隱に今や飢と寒さでをのゝいて居る行き倒れ人のあるのを發見した。大勤は彼に近づいて行つた。そして有合せの氣附け藥と若干のむすびとを與へて彼の危急を救つた。三千世界にたつた一人の弟のある以外（それも今は何處に暮して居るか其の生死さへも不明であつたのであるが）誰も身内としては無い彼を大勤は自坊に引き取つて下男として使つて來たのであつた。

かく奇しき緣によつて……而も命の救ひ主である大勤に對して丈助はモー影日向なく骨身を惜まずに立ち働いて、若し一旦緩急の場合には自分の體によつて其の危急を贖ふ事が出來るならば一命を的とする勇氣と

決心とは彼の頭を常に支配して居た。

怎うした境遇に置かれてあつた丈助は大勤の命とあるや毎時ものハキハキした返事をして活潑そうに用向きを果す爲めに寺の定紋の付いた渉藍色のはげ綴つた風呂敷を用意して出て行つた。

月が出るので河内の山脈が黝い大空に明闇の曲線を投げはじめた。絹のやうな絲を描いた雲が動きはじめた曠野の暗い大地をつゝんだ露が月の光りに照されて來た。極月の寒さがメキ〳〵と庵につめかける。

大亮は爐の中に絶へず薪を投げ入れた。

彼は師の大勤に言ふのであつた。

『得行此の意味が全く私には分りません。先師……其の人には成程絶對の權威を以つて居たかとも知りませんが而し夫は天龍川や大井川を蓮臺や肩車なんかで渡つて居た非文化生活の時代で御ムいますから……大正の今日は眞實に生きる時代でムいます。今までの私共の生活は生きて而して死せる者でムいます。』

『なせそんな事を云ふんじや。如來の淨行を行じて居るではないか俺に毎時も云ふ通り此れ以外眞實に生きる道があるか。お前は淨行が分らんと言つたが淨行夫が「佛心」なんじや。佛行じや禮拜であり奉仕なんじや。開基は此が爲めに一派を立てられて世の崇敬を一身に集められたでは無いか。淨覺は千里の道も遠しとせずもろこしから遙るばる其の令名を辿つてはせ集つたではないか。開祖の爲めには身命をとすると契つて指まで捨てし玄淨。丹沈。靜然とがあるではないか。其の高德は一世を靡たのじや。其の流は今に至つて今日の正心庵をなして居るのじやないか。淨行の恩寵はやがて眞實道の樂境に至らしむる生活其のものじや夫に何んの不服があつてそんな事を云ふのじや』大勤の靑白い顏にかすかに血の色が射た。大勤は一言一句語氣に力を込めて言つた。

『では淨行が佛心だとすれば淨行以外に佛心と云ふものも佛行も無いんですか。』大亮の聲は力んで居た。

『そうよそんな事が未だに分らんやうでは怎ふするのじや。』やゝうるさそうな聲で……

『而し私はそうとは思へません。私はマンマと凡ての事をも批判に受け入れる事は出來ません。私の煩悶は

淨行によつて解決するにあまり複雜です。そしてあまり大きすぎます。私も人間として生れて來た以上には人間並の事は致したうムいます。僧侶と雖も同じ血の通つて居る人間ですから……。』

と大亮の聲は振へて居た。戸外は一層靜寂を增して居た。ひとしきり鼠は天井の上をあばれまはつた。

『人間並みの事……人間並みの事とは何んじや富貴？名聞が……そして在俗と身を伍して一日も餘慶に生きのびやうと安逸を貪る心なのか……。』

愈々意氣天を突くの有樣でなほもつゞけるのであつた。

『そんな心はお前の妄執じや。邪見じや。其妄執を斷たんでは誠の淨行は產れぬ。眞實の道を步む事は出來ぬのじや、生れる時一文の錢を携へて來たのでもない、一人の友と云ふ者を伴れて來たのでもない、一日の生命をも持つて來たのでもない其處を考へねばならぬ。一合の米に一日の生命を生きのび得た事すら有難い事ではないか。俺とお前との此の二名が因緣あつて互に主伴となる事さへも誠に幸福な事じやないか一日の飯米が無くて飢に一夜を明したと云ふ日があるか。此が「淨行」の德じや求めんでも自から得られるのが淨行じや出家の心は虛に飯へる事死に入る事じや。一切は虛無なのじや心を虛しくする事が佛心じや。』

諄々と說き出す舌端は火を吐くやうであつた。天井裏の鼠はもう荒を鎭めて內外共に寂寞であつた。

大勤はなほも言葉をつゞけて……世の中の凡ては虛無じや宇宙の本體は何んであるか無極なんじや。無極で太極じや、太極より分れ出たのが春夢の萬象じや、宇宙の萬物は……宇宙の萬物はやがて無極に飯らなければならぬ。そこには生も無ければ死も無い喜として欣ぶ事もなければ怒として憎む事もないのじや。此の境地こそ吾開祖のお心なのじや。淨行は此れより出發しなければならぬ。玆に眞人間道があるのじや』大勤は前に比して强いて自分のある感情を抑へつけようとつとめた。

『……』小窓の下の棕梠の葉がガサ〳〵と風に吹きつけられるたんびに戸を打つのであつた。二人の間にしばらく緊張した沈默が續いた。

『御師範！貴方の御談しは强く解りました。だが而し今の御談しでは私は萬足が出來ません夫は人間の本性

を取り去つての御談しです。そんなに世の中を簡單に始末を附ける事が出來ましやうか、私は僧侶として生きるよりも先づ第一人間として生きこう御ムいます。』

大亮は消へんとする爐に薪をくべながらチョット口を噤んだが尙も思ひ切つた語氣で、

『わたくしはもうすぐ三十二になります過去三十年間の生涯は私に取つて誠に寂寞でした否寧ろそれは冷い人生でした「無味乾燥」と云ふ字を如實に味いましたこう云つては誠に御師にすみません二十何年と云ふ長い年月を御育くみ下された鴻恩は頭頂を以つて禮敬し一切を以つて供養するとも又報ずる事は出來ません。而し私の今申す事柄は過去幾年間の止み難い苦悶なんです。私の血を逆道せしめる處の悶でムいます。

因襲的な習慣とか洗滯した××の命に從つて生きていくよりも私の心の奥底から流動する處の萬人の琴線にふるゝ處の人間本然の性によつて呼吸して行きこうムいます。眞實の生の躍動其のものが私に取つてまことに親しいのでムいます』やゝ神經質的な青筋を額一面に立てて……

『そうだとすればお前の眞實に生きると云ふ事はどんな事なんじや。』大勤は言葉をため直してやゝ聞うとするような氣味を以つて……

『そうです人間本性を土臺とした淨行なんでムいます。いかなる高遠な理想も幽遠な哲理も此を無いがしろにした者であつたならば何んな値打ちも無いと思ひます。淨行は淨行として人生とかけ離れた超然として高々とまつて居るやうでは或は夫がたとへ高尙であるとは言へても人生の溫血に解け込んで人間其の者を左右して行く事は出來ません。淨行は見にくい人生……賤しき芥を以つてまみれて居る人生を淨化して行くのでムいますまいか。無極を以つて人生を眺め虛無を以つて世の中を律する事はとりも直さず此の世の破壞であり人生の否定であります」況んや人生の無い處には僧侶生活のある定理はムいません。』次の間の六疊には小僧のうめき聲が思ひ思したやうに氣味惡く聞へるのであつた。

『人生の煩惱を肯定し見にくき人生の裏面を淨化して行きたいのでムいます。夫にはほんとうに人間道を味はなければなりませぬ。虛飾も虛僞を投げ捨てゝ眞實に、赤裸々に人間の生活を味ひ乍ら淨行をして行き

たいのであります、此れより出發しない淨行は空行でありそして寧ろ罪惡なんでムいます。』大亮の聲は益々活氣を帶びて來た。

『どうしても御前は先師の流れを吸む事が出來ないのか否先師の言を一個の反古として省り見ないのか。』大勤は前身を微動させ乍ら言つた夫は彼が毎時も意氣まく時には怎した態度を取るのが常習だつた。

『御前はなぜ共共に氣を合して行く事が出來ないんじや。アヽ仕方が無いお前と俺とは互に異つた二つの道を歩まなければならぬのじや。』歎息の調子だつた。

『そうでムいます。』と大亮はつゞけた私は私としての道を歩みとうムいます私の淨行を行じとうムいます。たとへ道は互に異つた二つの道を歩みますとも而し私の血は御師範の血管に通つて居ると云ふ事をお忘れ下さら無いやうに御願い致します。』

と大亮の語句が言ひも終らぬや、大勤は爐の傍に忽倒した。大亮はをどろいた　やにはに彼は大勤の手を取つたがもう已に氷の如く冷たく成つて脈は何んの手ごたへも無かつた。死のブラックベールは大勤の面を覆ふて血の氣もなかつた。而し大亮の體には生氣〳〵した動脈が依然として淨く流れて居た。

時は已に三更をすぎて夜泣きウドンの氣味惡い笛は遠くかなたに眞夜の寂寞を通じて聞へるのであつた。

創作

轉變

下田冷涙

それは文永元年十一月十一日の遲い午後であつた。